

日欧交渉史資料拾遺

—『珍籍展覧会目録』と『開国小史』—

竹居明男

はじめに

日欧交渉史の分野に関しては、私は全くの門外漢であるが、近時架蔵に帰した古書の中に、従来はあまり注意されていないよう見うけられる同分野関係の書二点がある。この二点の概要を紹介かたがた、これまで調べ得た事柄をも併せ記し、もつて杉井六郎先生御退職記念の小論に代えさせていただきたいと思う。

一 丸善株式会社編『珍籍展覧会目録』（昭和七年刊）

本書は、昭和七年（一九三二年）十一月十七日より二十四日まで、丸善株式会社東京本社にて、また翌八年正月十四日より二十日まで同大阪支店において、「天正使節渡欧三百五十年記念珍籍展覧会」と銘打って開催された展覧会の目録である。同展の趣旨について本書巻頭に次のような一文がある。

天正年間九州の大友、大村、有馬三侯により歐州に派遣されたる四使節がイスパニア、ポルトガル、ローマ等々西欧諸地に遣しました印象は俄然極東ニッポンの存在を現実的に強調せるもので、マルコ・ポロにより僅にフェアリーランドの如く知られましたものが一躍して爾来布教と文化東漸に拍車を加へる機縁を胎したとさへ言はれて居ります。今回その渡欧後三百五十年に際し四使節の偉蹟を記念し過去数年間弊社が鋭意蒐集致しました関係貴書數百点と東洋古版地図數十点を上記期日間陳列し一般の御清鑑に供へ、併せて御希望により御売約に応じます。それ等は主として南蛮人渡來前後の事情や切支丹與廢の百年間を究めるに特にバイタルなクラシックのコレクションで再獲を難する奇書珍籍も多く、且つは日欧関係の進展を遙か數世紀に亘り従来の徳川時代の史記を覆へす重要資料も決して乏しくないと思考致します、就中偶々奇蹟的に弊社の所有に帰しました切支丹文献の代表「ギャード・ベカドル」上巻を御一覽に入れることの出来ますのは欣慶に堪へない所で、同書は別項村岡先生の御解説の如く現時世界にユニックの称ある最大稀観で御座います。就ては吾が書籍界創めてのこの催しに御賛同を得て汎ねく御一粲の榮を給はりますれば幸甚此上もなき次第と存じます。

この文章の中にすでに触れられているが、丸善は昭和六年に、それまでは日本国内に一部も存在しなかつた耶蘇会版『ぎや・ど・ペかどる』（邦訳本）上巻をイタリアの古書店から入手し、是非とも好事家の目を楽しませたく、密かにその機会をねらっていたというのが真相であつたらしい（『丸善百年史』下巻、昭和五十六年）。そこで、翌七年がいわゆる天正遣欧使節の長崎出発（一五八二年）から数えて丁度三五〇年目に相当する折を見て、丸善がこれまで収集してきた日本関係洋書一七八点と、東アジアの古地図四五点を出陳したのであつた。しかも姉崎正治・浜田耕作・幸田成友・太田正雄（木下空太郎）・佐伯好郎らの諸大家たちも、この催しを耳にして、それぞれの所蔵にかかる書籍・写真等を出品。「専門家を始め各方面から我が国の文化史上空前絶後の試みであるとして多大の絶賛を博した」展覧会であった（前掲『丸善百年史』下巻）。

しかしながら、この展覧会じたいについて——関係者はともかく——述べたものは意外に少なく、管見の限りでは吉田小五郎氏の「天正使節渡欧三百五十年記念珍籍展を見て」と題する小文（『学鑑』昭和七年十二月号）、及び石田



図1 珍籍展覧会目録（表紙）

幹之助氏の「キサトウスの『日本諸島実記』と西洋刊行最古の「日本地図」（『ビブリア』第三二号及び三六号、昭和四十、四十二年）の「正誤及び補遺」に触れてあるもの、の二点にとどまる。かつ同展の出品目録として製作された表題書も、あまり識者の注意にのぼらないので、ここに紹介を試みる所以である。

さて本書は、縦二二センチ、横一六・五センチの大きさで本文は一四三頁。これに随所に挿入されたアート紙の写真頁が計三四頁にのぼる。表紙は前記『ぎや・ど・ペかどる』（現在は天理図書館所蔵で、重要文化財指定）のデザインを流用して新村出氏の揮毫になる題字を嵌めてある（図1）。中扉にはほぼ同じデザインながら英語で題辞を記し、その裏に数条からなる例言を記す。奥付（筆者架蔵本は脱落。いま同志社大学図書館所蔵本による）によれば昭和七年十一月二十一日発行で、「実費金壱円」にて頒布されたらしい。

さて本文（横書）は先にも触れた丸善出品の洋書一七八点の書籍を対象としたもので、一々につきタイトルページを載せ、これが無いものはコロホン全文を記し、かつ本の大きさ、巻数、丁数または頁数、発行年、発行地を加え、さらに日本文による解説を付す。図版も極めて豊富に挿入されている。

書目の配列は、本書例言に

記載順は最初の「ぎや・ど・ペかどる」「天正遣欧使節記」「伊達遣使録」を除く他は取材項目の年代順に依り、又全般的な事項を扱へる通史類は其の刊年の順位に従ひ配列したり。（傍線（A）（B）は筆者）

とある通りで、(A) (B) 二種の配列が混在するため、一見したところやや不分明なところがある。以下、私見を交えて改めてその内容を整理しておこう。

まず冒頭に「天正遣欧使節につき」と題する幸田成友氏の小文があり、次に書目番号(1)として『さや・ど・ペかどる』を六枚の写真と共に掲げ、村岡典嗣氏による同書解説を付す。ついで天正遣欧使節に関するもの一〇点(2)、伊達政宗の遣使に関するもの四点(2)～(5)が続き、以下は右例言の傍線部(A) (B) 混在の部に移る。

まず(A)に属するものとしては

- ザビエル関係 一一三点 (47～89)
一五四四～六〇年 五点 (40～44)
一五七九～八一年 五点 (46～50)
一五八二～八四年 四点 (51～54)
一五八六～九〇年 三点 (55～57)
一五八九～九六年 一〇点 (61～70)
二十六聖人殉教関係 九点 (71～79)
一五九九～一六〇二年 四点 (80～83)
一六〇六～一五年 八点 (84～91)
一六一五～二一年 五点 (100～104)
一六一七～二四年 一点 (106)
ピントー関係 五点 (107～111)
一六一二年の大殉教関係 一〇点 (114～123)
一六一四年 五点 (128～130)
一六二五～三三年 一二一两点 (133～154)
一六三一～三七年 六点 (155～160)

一六四三三年 二点 (163~164)

があげられ、これ以外の(16)(58)~(60)(84)~(90)(99)(105)(112)(113)(124)(125)(131)(132)(161)(162)(163)計三六点は(B)の分類に属する。例えば、(84)はフェルナン・グレイヨ著『耶蘇布教史』第一巻西班牙訳本、(112)はニコラス・トリゴー編『日本切支丹迫害史』、(132)はソリエー著『日本教会史』第一巻のこときである。このように、本目録に掲載された書目の大部が、鎖国前後までの、日欧交渉史上の初期百年間に關するもので占められていることは、内容上の一特色をなす点である。

いつたゞ、本書が収載しているような日本關係の西洋刊行書の目録・解題の類書としては、古くはペジヨス(一八五九年刊)、コルディエ(一九一二年刊)、ウェンクステルン(第一巻、一八九五年、第二巻、一九〇七年)、ナホック(一九二八年刊)による著名なものがあり、キリスト教關係に限ってはバッケル(一八五三~六一年刊)、ゾンマアフォゲル(一八九〇~一九一〇年刊)、ショットライト(一九二八~三〇年刊)のすぐれた目録・書誌が存する(石田幹之助「日本關係西籍目録に就いて」、『読書展望』昭和二十二年九月号所収)。

当然ながら本目録の解説も、それら先行の業績に拠るところ多く、現に前記例言に「引用書誌の主要なるもの」一五点を列記し、なかでもコルディエ、ショットライト、ゾンマアフォゲルの三著に負うところ極めて多いことを断つているのである。

しかしながら本目録の解説は、一讀、實に簡にして要を得ており、とくに書誌的事項については前記先行目録・解題書との異同を一々注記し、その点、コルディエまたはショットライトの著に記載の無いもの、あるいは未見と注しているものが、私の数えたところ二五点も本目録に含まれていることは、それだけでも注目に値するものがある。また、解説は掲載書の著者、編者、訳者の簡潔な伝記にも及んでおり、実に行届いたものがある(図2)。

そして何よりも、この解説が日本文であること。このことは浩瀚な先行諸文献がすべて西欧語によるものであるこ

(76 a) Arcei. (Continued).

Le Rue Giapponesi Sermon de Monsignore Paolo Arcei Vescovo di Tortona. Della bellezza di tre Martiri del Giappone Religiosa della Compagnia di Gesù. Fatto in Castelnovo nell' occasione della Festa, che lui si celebrò de gli intesi Beati Martiri li 6. di Febbraio 1628. Con Privilegio. (Vignette) In Milano. Appresso Piero, del quon, Pacifico Punto, & Gio. Battista Piccaglia Stampatori Archivi. 1628. (6 vols.)

Small vellum, square, 2 parts in 1.

1628. 2 vols. 3 fol. 11.4 cm. 聖母の御心を傳達する聖典に於けるイタリーカントト

ルの「Honor Patri Arca」の銘板。Milano. 1628.

第一編二十六章ハラッカニヨシテ黙示録を説し、第二編三十三人の殉道者を記すものである。

(77) 1639-1921 (第十九六一七二五二年)

Cover Illustration, Plate No. XVII and Opposite.

San Felipe de Jesús—(A Collection of Mexican pamphlets, etc., concerning his life, and various sermons in his commemoration.)

Bound in this volume, loosely bound in old calf and yellow cases.)

1639. 2月5日は日本宣教で殉道された聖人聖ペドロ・アーノ、San Felipe de Jesus (は、ペドロ・アーノ・サン・フェリペ・デ・キリスト)は、モルコアミンに於て命を落とした後、彼の死後、第三十二六年の殉道者の中に列入され、西欧の祭日、即ち、モルコアミンの祭日、モルコアミンの殉道者として、第三十二七年の十一大月の二十日、即ち、モルコアミンの死の日と定められた。また、モルコアミンの墓地は、モルコアミンの死の日と定められた。

本集は、San Felipe de Jesusのもの。Commemoration of his death, his life, his works, etc., 第三十二八年の殉道者として、天主教のキリスト教の信者にて、San Felipe de Jesusの死の日と定められた。——Collection comprising 3.

1. **Medina, Fr. Baltazar de.**—Vida, Martirio, y Beatificación del Invicto Proto-Mártir del Japón San Felipe de Jesús. Patrono de México su Patria, Imperial Corte de Nueva España en su Nuevo Mundo. —(Con Licencia de la Real Corte de Indias, Madrid, 1639.) Por Juan de Elizalde, Impresor, y Mercader del Real Impresor de Indias. Año de 1639.

Small 3to. 20 lbs. + 64 lbs. + 8 lbs. (With an engraving.) (Mexico, 1639.)

(See Illustration, Plate No. XVIII.)

(Continued over.)

VIDA, MARTYRIO, Y BEATIFICACION DEL INVICTO PROTO-MARTYR DE EL JAPON SAN FELIPE DE JESUS, PATRON DE MEXICO SU PATRIA, IMPERIAL CORTE DE NUEVA ESPANA en su Nuevo Mundo.

QUE ESCRIVIO

FRAY BALTASAR DE MEDINA, SU COMPATRIOTA
Leyendo el original, Disfrutando habitualmente y Chascia de la
Santa Provincia de la Compañía de Jesús, y de Recetas Diferentes de
N.P.S. Francisco, y Antonio, y Pedro, y Domingo, y Francisco, y
Pedro, que fuere la de S. Gregorio de Nacipas.

SEGUNDA IMPRESSION.

A EXPENSAS DE LA DEVOTA, NOBLE,
y general Patera de México, y a quien dedicada.

CON LICENCIA: En Madrid, en la Imprenta de los Herederos
de la Viuda de Juan García Infante. Año de 1751.

Titlepage of the Second Volume of Book No. 77.

図2 珍籍展覧会目録（内容の一部）

とを考えると、西欧語に弱い私などにはまことにありがたいことと言わなければならない。この点、本目録以後の同種のものをさがしてみると（目録のみで解題の無い書物はしばらく措く）、歐文のものはさて措き、日本文のものになると国立国会図書館・カトリック文化協会編『日欧文化交流』（昭和二十四年）、遠藤元男・下村富士男編『国史文献解説』（昭和三十二年）中の第三部、天理図書館編『泰西日本記集』（昭和三十二年）及び同II（昭和五十年）、京都外大付属図書館編『日本関係資料図録』（昭和四十八年）、佐治芳雄編『邦訳日本研究文献解説』（昭和五十五年）、天理図書館編『西洋人のみた日本』（昭和六十年）あたりが主要なものではなかろうか。本目録は、内容的にみても日本が西欧と本格的に接触を始めた初期百年間に於するものとしては、解題の用意周到、豊富な図版、日本訳の未だ無いものを多く含む点等々、日本文で書かれたものとしては、これら戦後の諸文献に勝るとも劣らない価値を有するものと言えよう。

実は昭和十一年から『統異国叢書』六冊が出版されはじ

め、その第四冊が『日本関係西籍解題』（石田幹之助担当）にあてられていた。しかしながら諸般の事情からついにこれが未刊に終っている今日（前掲『国史文献解説』の第二部に、これが刊行済みかのように記すのは誤り）、本目録の資料的価値はさるに高まるものと言えよう。本目録の例言にもあったように、展覧会じたいが即売会を兼ねており、今日ではこのままのまとまった姿で見られない点も、この際忘れられてはならないであろう。

なお本目録より少し遅れて、同様な方法で解説を加えた諸家出品書籍及び東亜古地図目録、そして人名・書名索引を含む付録が刊行されており（『丸善百年史』下巻）、これがあつて本目録は完璧なものとなるが、残念ながらこちらの方は筆者未見である。

ちなみに架蔵の本目録の表紙裏には「荒木伊兵衛様 山崎民雄」なる墨書きがある。後者「山崎民雄」は未詳。あるいは本目録編纂に関った人物の一人か。前者の荒木伊兵衛は、『文明移入に関する古書展覧会目録』（大正十四年）、『日本英語学書志』（昭和六年、同五十七年復刻）を編んだ大阪の古書店主荒木伊兵衛（幸太郎）と同一人物だと思われる。

一 恩田栄次郎著『開国小史』（明治三十二年刊）

本書は、幕末の嘉永元年（一八五三）及び翌安政元年（一八五四）におけるアメリカ合衆国ペリー提督来日の模様を主題とする。

この主題に関しては史料もかなり豊富で、専著・論文ともきわめて多いが、管見の限りでは本書を引用したり、参考文献目録に挙示したものは無い。ペリー来日のみならず、広く日欧交渉史関係の文献目録として権威のある松田毅

故勝海舟伯題辭
中江篤介君序
恩田榮次郎著
林昇君序

開國小史

横濱 信陽堂刊行

図3 開國小史（中扉）

また稀観本に属するかと愚考するが、単に珍しいだけではなく、その内容にも興味深いものがある。
架蔵本は残念ながら原装釦を保持していないが、さるベテランの古書店主に見ていただいたところ、昭和も早い時期の本格的な製本が施されているとのことである。

本書はいわゆる菊判ないしA5版洋装の体裁で、本文は四五一页。末尾の奥付によれば明治三十二年六月二日発行、定価金二円。発行所は横浜市内の信陽堂である。著者恩田榮次郎については、奥付に「横浜市羽衣町二丁目三十八番地寄留、長野県士族」と記載がある以外は未詳である。

中扉に（図3）

故勝海舟伯題辭

中江篤介君序

一編『日欧交渉史文献目録』（昭和四十年）に載録なく、ようやくその改訂版京都外国语大学付属図書館編『対外交渉史文献目録・近世篇』（昭和五十二年）に載録をみた。筆者が少し調べたところでは国立国会図書館には所蔵し、同館刊行の『明治期刊行図書目録』第一卷（昭和四十六年）には登載されている。かれこれ思うに、先の改訂版目録は国会図書館本によつて収載されたものではなかろうか。かくて本書も

も載録なく、ようやくその改訂版京都外国语大学付属図書館編『対外交渉史文献目録・近世篇』（昭和五十二年）に載録をみた。筆者が少し調べたところでは国立国会図書館には所蔵し、同館刊行の『明治期刊行図書目録』第一卷（昭和四十六年）には登載されている。かれこれ思うに、先の改訂版目録は国会図書館本によつて収載されたものではなかろうか。かくて本書も

林昇君序

とあるように、巻頭に海舟の揮毫になる題辞（海舟は明治三十二年一月十九日死去）、次に中江兆民及び林昇（後述する林復齋の子）の序があり、つづいて林大学頭（復齋）とペリー提督の肖像画が写真版で掲げられ、さらに折込で嘉永七年（安政元年）二月十日横浜における「日本人亞墨利駕人應接之図」が載せられている。このうち明治三十一年四月付の「中江兆民撰」の序文は岩波書店版の『中江兆民全集』には見当たらないので、次に掲げておくことにしよう。

今ラ距ル一四十有余年浦賀埠頭米国籍隊ノ警砲一発シテ鎮國ノ夢為ニ撃破セラレシ時ヨリ厥後諸藩ノ人士或ヘ尊攘闢幕ノ議ヲ騰ケ或ハ佐幕開國ノ論ヲ唱へ桜田ノ変ヤ十津川ノ乱ヤ曰ク七郷ノ出走曰ク伏見ノ戦争ヨリ相踵テ維新開國ノ大業ヲ成就スルニ至レリ凡ソ此間内外ノ事情後世史家ノ財料ニ入ル可キ者極メテ夥シ此書幕府ノ儒臣林大学頭ノ遺稿ニ係ル米使應接録ニ基キ旁ラ著者カ數年間專心留意蒐集シタル材料ヲ収メ専ラ写実ヲ旨トシ小大漏ス「無シ惟フニ世間此種ノ書無キニ非ラスト雖ビ多クハ是非ヲ顛倒シ紫朱ヲ混淆シ中興ノ歴史ト云ハシヨリハ寧ロ裨官ノ想像ト云ハシ而已是書ノ如キ者眞ニ碁中ノ昆吾ト謂フ可シ予續説一過覚ヘス案ヲ拍ツ乃チ聊カ所思ヲ記シテ之ヲ巻首ニ辯スト云フ

さて本書には目次に類するものが無く、繙説にいささかの不便を感じるが、明治三十二年五月付の著者による凡例を手がかりに内容把握を試みてみよう。凡例全文は左記のことである。（便宜、記号Ⓐ～Ⓓを付す）

一本書編纂ノ目的ハ普ク世人ヲシテ當時ノ状況ヲ知ラシメンカ為メナレハ苟モ事実ヲ知ルノ材料ト思惟スルモノハ細大漏サス之ヲ記載セリ……Ⓐ

一本書ハ林大学頭ノ遺稿ナル應接録ヲ以テ基礎ト為セシト雖庄該應接録ハ嘉永七年ノ分ニシテ彼理渡来ノ第一回ノ時ナリシカ其第一回ノ分ハ材料多ク小川茂周氏ヨリ得タルモノナリ……Ⓑ

一本書中林氏遺稿ノ如キハ一言一句ト雖庄敢テ妄リニ改竄セス是レ其眞意ヲ失ハシヲ恐レテナリ然リト雖庄編纂ノ順序ヲ変シタル處ナキニアラス則チ書簡或ハ条約等ノ如キ遺稿ニ之ヲ付録ト為スト雖庄本書ニハ見解ニ便ナルヲ以テ適當ノ処ニ挿入シタレハナリ……◎

一余固ト淺学短才頗ル文辭ヲ能クセス故ヲ以テ行文渢常章句相前後シ所説意中ヲ尽サ、ル所ナキニアラス讀者幸ニ之レヲ諒セヨ
……◎

この例言から知られるように（㊭○）、本書の一つの柱はアメリカ応接係林大学頭辯の『応接録』（『墨夷応接録』）とも。安政元年正月十九日より同年六月二日至る、神奈川ならびに下田における米国使節応接の記録）を収録したもので、一三八頁から末尾四五一頁まで、本書の約七〇パーセントを占める。この記録は安政元年度の交渉についての基本史料としてよく知られており、通常は『大日本古文書・幕末外交文書』附録之一（日記部分）及び第四～七巻に分載（書簡・条約等の文書類）のものが用いられる。したがつて特に新史料であるわけではないが、同応接録の翻刻としては右文書附録之一刊行の大正二年（一九一三）をさかのぼること一四年前であること、また『外交文書』本は「明治九年、林昇氏所蔵ノ原本ヲ騰写」した「内閣所蔵本ニ拠」つたものであり（五二八頁）、『開国小史』所載本は原本に拠つた可能性もある。この点、今後の対照比較を綿密に行なう必要があろう。

次に本文最初にもどると、第一頁目に「外國船渡來之沿革」と題した記述があり、一応九三頁半ばまでこれが続くものとみられる。元和二年、宝曆四年、文化八年、文化十二年、天保八年、……以下安政五年六月横浜開港までの比較的簡潔な年表風記事（一三頁半ばまで）、嘉永六年六月来航時のアメリカ船及び使節、また日本側応接係役人の概要（二三頁半ばすぎまで）、六月九日～十一日までのじく簡単な記述（一四頁半ばまで）、そして嘉永六年六月九日、安政四年十月二十六日、同年十一月六日の書簡、対話録など（九三頁半ばまで）から成る。このあたりは著者恩田栄次郎の、収集資料を交えた執筆部分かと推測されるが、若干の資料はやはり『幕末外交文書』収録史料中に対応するものがあり、かつ細部に小異を有する。あまり多くは望めないものの、なお精細な検討を要するところである。
さて例言④に示唆があるが、今日の時点でもしろ最も興味をそそるのが、以上の残り（九三頁半ば～一三七頁）に

掲載されている「四十年前の日本」と題する一篇の談話筆記である。まずは、この談話筆記についての著者恩田の記述をみてみることにしよう。

左に記載する一篇は読者諸氏の参考に供せん為め編者か特に小川茂周氏の談話を筆記したるものにして篇末の問答は著者と小川氏の問答なり

氏は船耳順を驗る温厚雰実の一偉翁にして現時神奈川県三浦郡豊嶋村公郷に住し世を避け花鳥風月を友とす氏が同村の名主兼水主差配役として一部警衛の任に当りしは則ち本巻の主眼たる米國公使ペルリ浦賀入港の際なりし爾後氏は区長となり郡長となり明治三十一年四月迄職を奉せし人なり故に其の談話せられたる事項は皆な其実歴に關るを以て當時の状を窮知するに裨益ある渺少にあらずと信す

このように談話者の立場・経歴、そして談話の意義を簡潔かつ適切に述べたあと、談話内容を記す。以下、必らずしも記述がその都度切れているわけではないが、六文字下げの、いわゆる『小見出し』に相当するものを列挙しておくことにしよう。

開港当時の実況／房総四家の警固／漁船を以て軍艦と鬪はんとす／風あれは旗を巻く／大砲は百々筒／八陣の備／司令官（藩士）皆船に酔ふ／双眼鏡にて船を覗はるゝに窮す／陣鐘陣太鼓／祝砲に驚て仮壇を背負ひ出す／開港当時の□状／珍しかりしは姿見鏡／紙に捻りしものあり／蒸氣器戒バ子椅子／ペルリ帰国／手桶を縛るは困難なりと／こは大変切支丹なり／篩の毛三本／浦賀の波止場にて焼棄したり／山の絶頂には物見馬／槍の鞘を扱ひし／（以下、著者と小川との問答部分）

周知のように嘉永六年六月ならびに安政元年正月～六月の二度にわたるペリー艦隊来航についての日米両側の、かつ公私それぞの記録類は決して少なしとしない。しかし、嘉永六年度の△△△・日本側私的記録になると、その数はずつと少なくなるのであるまいか。両度にわたる米側記録の代表としてはホークス編『ペルリ提督日本遠征記』、ウイ

リアムズ著『ペリー日本遠征隨行記』、ペリーじしんの『日本遠征日記』があり、これに匹敵する、まとまつた日本側記録は無い。これを日本人側の私的な記録に限れば、昭和七年公刊の『亞墨理駕船渡来日記』があるが、これは安政元年度のものである。

嘉永六年度（一應、ペリー一行滞在時の六月三日～十三日に關するもの）の関係資料としては、「米使ペルリ初テ渡来浦賀栗浜ニ於テ国書進呈一件」の表題のもとに『幕末外交史料集成』第二卷三八一頁以下にまとめられたものがよく利用され、中に応接掛香山栄左衛門以下数人の浦賀付与力からの聞書を収める。このほか管見に入ったものとして筆者未詳『浦賀日記』（『野史台維新史料叢書』第九巻所収）、『神奈川県史・資料編』第十巻収録の諸史料（とくに史料番号一九一、一一）、吉野真保編『幕末明治年間録』及び藤川整斎自筆稿本『嘉永雜記』（影印本あり）所収の史料ぐらいであり、あとは未刊史料を探るほかない（『国書総目録』参照）。

こうした中について、四十年前を回想した談話であり、かつ前後の脈絡をやや欠いた断片的なものではあるが、小川の回想録は最初のペリー一行との接触の模様を人々と伝えた、得がたい資料と思われる所以である。前記アメリカ側の諸記録に、その名を見出せないものの、小川は艦隊のいづれかに乗船していたことも貴重である（例えば、ウィリアムズの『隨行記』西暦一八五三年七月十三日、十四日、十六日条参照）。

具体的な回想の内容は紙幅の関係で委細をあげ得ないが、ペリー一行応接用の椅子として、付近の寺の曲景を修繕して用いたこと（前記『隨行記』七月十三日条参照）、米軍艦監視の日本側小舟にては、双眼鏡で覗かれる故に服装を正し、かつ姿勢を崩さぬよう命令が出て、實に難儀したこと、祝砲に驚いて付近の住民たちが一齊に逃げ出したこと、乗艦したときに、全身が映る姿見鏡に驚き、またローソクをもらって来たこと、米軍艦から捨てられた葡萄酒や麦酒の空ビン処理を担当したこと、ペリー一行よりの種々の贈物は、一行出帆の翌日に浦賀港にて焼却してしまった

」と、等々興味ある事実を伝える。

あとより、この種の断片的な事実をいくら積み重ねたとして、そしたる意味は無いとする御意見もあろうが、今もし、あたっては、ドキュメントの一種としての貴重な見聞を含む本書の意義を平直に評価したいと考える。大方の識者の御示教を得て、さらに探究を続けていく所存である。

〔付記〕 小論を執筆するにあたり、杉井六郎教授をはじめ、服部純一人文科学研究所事務長、また同志社大学図書館閲覧課の皆様、さらに古書建尚学堂書店主には大変御世話になりました。末筆ながら感謝の意を表したいと思います。

(たけい あきお・同志社大学文学部助教授)